佛教大学　文学部論集　第98号（2014年３月）

# サリンジャーはなぜホールデンに『武器よさらば』はフォニーだと言わせたのか？

## ――サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』とヘミングウェイ――

野　間　正　二

〔抄　録〕

About a year ago Holden was recommended by his elder brother D.B. to read "so terrific" *A Farewell to Arms*. But Holden cannot accept his brother's appraise and rejects the book and the main character Henry as "phony." Why is Holden's evaluation of Hemingway's novel in stark opposition to D.B.'s? To answer the question we have to consider the two points. One is Holden, a 17-year-old high school dropout, will arrive at the age for conscription within a year. Another is that D.B. is not only a returned soldier who hates war and army but a professional novelist. Taking account of their own special circumstances, we can understand both D.B.'s recommendation and Holden's response.

Then, why does Salinger dare to tell us Holden's bitter evaluation of the novel? First, it is because Salinger wants to suggest that adolescent Holden does not know about life and war enough to understand the novel. Second, Salinger tries to indirectly express he does not always place high value on all of Hemingway's works.

**キーワード**　サリンジャー、ヘミングウェイ、ホールデン、戦争体験、戦争小説

## ［本文］

サリンジャー（J.D. Salinger）とヘミングウェイ（Ernest Hemingway）との関係を考えるうえで、研究者の関心を集めている個所が、サリンジャーの代表作『ライ麦畑でつかまえて』（*The Catcher in the Rye*, 1951）にある。主人公で語り手でもあるホールデン（Holden Caulfield）が、ニューヨークの夜の街を歩きながら考えたことを語っている、次の部分であ

る。なお、ホールデンがニューヨークの夜の街中を歩いていたのは、1949年12月18日（日曜日）で、ホールデンはこのとき16歳だった（野間　12-15）。また、このことを思いだして語っている場所は、その時からおよそ半年後の1950年夏の病院だった。

> ところが、兄のD.B.がぼくによく分からないのは、戦争をあれほど憎んでいたのに、そでいて去年の夏にあの『武器よさらば』という本をぼくに読ませようとしたことなんだ。あの本はスゴイと言ったんだ。それがぼくには理解できないんだ。その小説には、まぁナイスガイだ思われているヘンリー中尉という名の男がでてくるんだ。兄は軍隊や戦争とかをメチャ憎んでいたのに、ヘンリーのようなフォニーな男を好きになれたというのが分からないんだ。ぼくが言いたいのはね、たとえば、あんなフォニーな本を好きになれるのに、一方でリング・ラードナーの本や兄自身も絶賛している『グレート・ギャツビー』なんかも、どうして好きになれたのかが分からないんだ。ぼくがそう言ったときには、兄は気分を害して、この小説が分かるにはぼくが若すぎるんだと言ったんだけど、ぼくはそうは思ってない。兄には、ぼくはリング・ラードナーと『グレート・ギャツビー』なんかが好きだと言っておいた。じっさいその通りだったんだ。ぼくは『グレート・ギャツビー』に夢中だった。あのギャツビーは、「オールド・スポート」と言うんだよ。そこがマイッていたところなんだ。(141)

この引用部分で、ホールデンは、ヘミングウェイの『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*, 1929）とその主人公ヘンリー（Frederic Henry）とをフォニー（phony；インチキ）だと断定している。この時期のホールデンにとって、フォニーは価値判断の基準となっている概念だった。フォニーなものはホールデンにとっては否定されるべきものだった。ホールデンは『武器よさらば』を全否定しているのだ。

この1949年の時点では世間は『武器よさらば』に高い評価をあたえていた。だから、世の中の多くのものをフォニーだと断定して、世の中の多くのものを受けいれることができない思春期のホールデンが、評価の定まった大作家の作品を、フォニーだと否定的に見なすことはありえる。しかし一方でホールデンは、フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）の『偉大なギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）は、夢中になれる本で、「マイッていた」と告白している。

ホールデンは、アメリカ文学史上で、1920年代を代表する傑作だと評価が定まっている二つの作品を両方否定しているわけではない。ヘミングウェイの作品を否定して、フィッツジェラルドの作品を絶賛しているのだ。世間一般の評価をたんじゅんに拒否しているわけではない。では、ホールデンは、なぜ『偉大なギャツビー』を絶賛していながら、『武器よさらば』を全否定しているのだろうか。そのことを考えてみよう。

## I

ホールデンが冒頭に引用したことを考える切っ掛けは、その日の午後にラジオシティで戦争と関係する映画を見たことにあった。ホールデン自身も、原文で１頁前の段落の始まりの部分で、「そういう戦争映画はいつでもぼくにそんなことを考えさせるのだ」(140)と語っている。先の引用部分は、直前に見た戦争映画によって触発されたホールデンの考えの一部なのである。言いかえれば、『武器よさらば』の否定と『偉大なギャツビー』の絶賛とは、戦争にたいするホールデンの考え方を表明するための手段なのだ。

それではホールデンは、戦争にたいして、どのような考えをもっていたのだろうか。ホールデンは、同じ段落内で、まず、「もし戦争に行かなくちゃならないとすると、ぼくは耐えられるとは思えないな。まったくダメだな。奴らがキミをただ連れだして撃ち殺すとかしても、そんなに悪いことじゃないだろうな、でもな、キミは軍隊にメチャ長い間いなければならないんだ」(140) と、読者に語りかけている。

ホールデンが戦争と軍隊とを嫌っていることは分かる。しかし後半の部分は意味がとりにくい。原文で示すと、It wouldn't be too bad if they'd just take you out and shoot you or something, の部分である。They が誰をさすのか？なぜキミを take out するのか？どこへキミを take out するのか？どんな理由からキミを shoot するのか？そういう疑問が生じるのだ。具体的な説明がないから分かりにくい。

しかしそうした疑問は、同じ段落内の29行後の次の部分――「誓っていうけど、もし今度万一戦争があったら、奴らがぼくを連行してぼくを銃殺隊の前に立たせる方がマシだよ。ぼくは異議を唱えないと思うよ」(I swear if there's ever another war, they better just take me out and stick me in front of a firing squad. I wouldn't object.) (141)――から解ける。ここでホールデンは、徴兵されて戦場で戦うよりも、徴兵拒否で官憲に連行されて、銃殺される方がマシだし、そしてその官憲の命令に従容として従うつもりだと断言している。

このホールデンの断言を読むと、29行前の意味のとりにくかった文の意味もはっきりする。They は警察や憲兵隊などの官憲をさし、キミが take out される理由は徴兵拒否で銃殺されるためで、take out される場所は処刑場の銃殺隊の前であることが分かる。

ホールデンは、同じ段落内において、ほぼ同じ意味のことを２度も繰りかえしている。しかも最初の文では、謎めいた言い方と、読者に「キミ」と呼びかけることとで、読者の関心をひきつけている。その29行後で、「ぼく」という立場で最初の文の謎解きをして、つまり個人的な見解だと断ったうえで、反戦・反軍の立場を明確にしている。結果として、ホールデンの反戦や反軍の意思が印象ぶかく伝わってくる。

この言葉の次に、冒頭の引用文がつづくのである。軍隊も戦場も経験した兄の D.B. は、引用文にあるとおり、軍隊も戦場も憎んでいた。その兄が、昨年の夏にホールデンに『武器よさ

らば』を読むことを勧めた。ホールデンが「D.B. がよく分からない」（What gets me about D.B.）と悩み苛(いら)つくのも、ホールデンが16歳の少年であることを考慮すると、ある意味で理解できる反応だ。

なぜなら『武器よさらば』は、第一次世界大戦におけるイタリアの戦場をおもな舞台としているからである。しかも主人公のアメリカ人のヘンリー中尉は、傷病兵運送要員ではあったが、はるばるイタリアまで志願して戦場にやってきたのだ。とすれば、徴兵されて戦場に行かされるぐらいなら徴兵拒否で銃殺刑になった方がマシだと主張しているホールデンが、冒頭の引用文に見られるように、ヘンリー中尉と『武器よさらば』とをフォニーだと主張するのも納得がいく。

そして一方で、『偉大なギャツビー』に夢中になっているのも理解できる。なぜなら『偉大なギャツビー』は、表層の物語を大まかに要約すれば、1922年のニューヨークを舞台にした恋愛小説だからである。たしかに、軍隊も戦場もちょくせつ描かれてはいない。だからホールデンが、拒否反応を抱かずに『偉大なギャツビー』を読めたのは理解できる。しかもホールデンが語るところによれば、ギャツビーが作中で使う Old Sport（＝「ねぇ、きみ」程度の呼びかけ語だが、当時のオックスフォード大学の学生が使っていたジャーゴン）という言葉に、ホールデンがマイッていることが、『偉大なギャツビー』にホールデンが夢中になっている理由である。今風にいえば、ギャツビーが口癖のように使う呼びかけ語の Old Sport がカッコイイから、『偉大なギャツビー』にマイッていることになる。言葉足らずの点（＝原文では、Old Gatsby. Old Sport. That killed me.）をふくめて、16歳の少年らしい反応である。

まとめると次のようになる。ホールデンは『武器よさらば』をフォニーとして拒絶している。しかしそれは、いわゆる世間一般の評価（＝権威）を拒否しているホールデンの思春期の心理のたんじゅんな反映ではない。またもちろんフレンチが主張しているような、結婚せずに性交渉する男女をホールデンが拒絶している（French 68）からでもない。現在17歳の高校中退者が直面している不安の反映なのである。18歳になれば確実に徴兵登録をしなければならない。しかも冷戦の最中である。もしかすると、1950年の夏まで病院にいたホールデンは病院で同年の６月25日の朝鮮戦争開戦の報を聞いていた可能性がある。高校中退者であるホールデンは、戦場にかり出される恐怖は身近にあったのだ。だからホールデンは、戦争と軍隊にたいしてつよい嫌悪感をもっていた。その嫌悪感が、『武器よさらば』はフォニーだという断言のかたちで、ダイレクトに現れているのだ。もちろん、このとき17歳だったホールデンの文学鑑賞能力の浅さが、その直截な拒絶をたんじゅんなものにしている。

## II

ところがここで、注意しなければならないことがある。冒頭で引用した文に見られるように、

兄のD.B.は、『偉大なギャツビー』をホールデンと同じく絶賛しているけれども、『武器よさらば』もスゴイ（so terrific）と最大限に評価しているのだ。そして昨年の夏にはホールデンに読むことを勧めている。16歳の弟に勧めたのだから、『武器よさらば』によほど感激したのだろうと推測できる。このことは何を意味するのだろうか。言いかえれば、作者のサリンジャーは、ホールデンと対立するD.B.の意見を、何のためにあえてここでホールデンに語らせたのだろうか。

そのことを考えるためには、まずD.B.について考える必要がある。兄のD.B.は、結論を先にいえば、実は、作者のサリンジャーに近い人物として描かれている。両者のおもな類似点７つを、次に挙げておく。（＊斜線の前の「　」で括った部分がD.B.にかんする作品中の記述で、斜線の後半の部分がサリンジャーの経歴などである。）

①「兄は家にいたころは、まっとうな作家だった」(1)。／　サリンジャーは1947年１月頃まで両親と同居して、『ニューヨーカー』などの雑誌のために短編小説を書いていた。

②「短編集のなかで最高のものは『秘密の金魚』（“The Secret Goldfish”）だ」(1)。／　当時のサリンジャーの最高傑作は短編「バナナフィッシュに最適の日」（“A Perfect Day for Bananafish,” 1948）だったし、1945年９月に短編集の発行も提案されている（Hamilton 93）。

③「兄は、今ハリウッドに行っていて、身を売っているのだ」(2)。／　サリンジャーは、短編「コネティカットのひょこひょこおじさん」（“Uncle Wiggily in Connecticut,” 1948）を1949年に映画化した『おろかなり我が心』（*My Foolish Heart*）というお涙頂戴映画に激怒して、それ以降自作品の映画化をかたくなに拒否した（Hamilton 107）。

④「ぼくの一番好きな作家はD.B.なんだ」(18)。／　サリンジャーは、自分自身のことをメルヴィル以降のアメリカで唯一の本当に優れた作家だと自認していた（Hamilton 100）。

⑤「兄のD.B.は４年間ものあいだ軍隊にいたんだ。戦場にもいたんだ、つまりDデイなんかに上陸したんだけど、兄は戦争よりも軍隊をより憎んでいたとぼくは心底信じてるんだ」(140)。／　サリンジャーは、1942年春から1945年秋までの約３年半軍隊にいた。その後も、民間人の分遣隊の一員として1946年４月まで連合軍のために働いた（Slawenski 143）。ユタビーチにDデイ（６月６日）に上陸もした。また、自伝的な色彩が濃いと見なされている短編「エズメ」（“Esme,” 1950）では、軍隊組織のやりきれなさが活写されている。さらに、1946年７月26日のヘミングウェイ宛の手紙では、現在では戦争PTSDとみなさる症状で入院していた病院で、医者などが、軍隊は好きかと親しげに聞いてくるので、「いつだって軍隊が好きだよ」（I’ve always liked the Army.）（Salsberg）と答えておいたと、つよい皮肉をこめて書いている。

⑥「その後、兄は海外にゆき戦場なんかにも出たときも、負傷なんかすることはなかったし、誰かを撃ち殺す必要もなかった」(140)。／　サリンジャーは、一般の兵士ではなく、防諜部隊

（CIC）のドイツ語を専門とする尋問や情報収集の専門家だった。また、戦場で心が傷ついて入院までしているが、肉体的な負傷はしていない。

⑦「お兄ちゃんはハリウッドにいてアナポリスに関する映画を書いていなければならないかもしれないわ」(164)。(＊妹のフィービーの言葉。)／　アナポリスは海軍兵学校（US Naval Academy）をさす。映画『おろかなり我が心』の出来に憤慨していたサリンジャーは、映画会社 MGM のゴールドウィン（Samuel Goldwyn）にハリウッドに来て、海軍兵学校（a naval academy）の若者の恋愛物語を書くように要請されたとき、激怒している（Hamilton 107)。

以上の 7 つの点からだけでも、D.B. は、作者サリンジャーと近い人物として描かれているといえる。ホールデンよりも、兄の D.B. こそが、作者サリンジャーの等身大の姿に近い人物なのである。

とすれば、『武器よさらば』に関していえば、ホールデンの意見よりも、D.B. の意見の方が、作者サリンジャーの意見をより濃く反映している可能性がある。少なくとも、D.B. の意見を無視して、ホールデンの意見は、作家サリンジャーがこの作品で述べようとした意見だとダイレクトに見なすのは短絡であるのはあきらかだ。たとえば、「サリンジャーがヘミングウェイを嫌い、フィッツジェラルドを高く買っていることは、『ライ麦畑』の読者なら周知のこと」（渥美 233-34）と見なすのには慎重であるべきだ。また、次節でくわしく述べるように、たとえば、フレンチ（Warren French）やアレクサンダー（Paul Alexander）などの批評家が『武器よさらば』にたいするホールデンの手厳しい批判にのみ注目して、その批判が唐突で謎めいていると考えて、その原因をサリンジャーとヘミングウェイとの現実の関係にダイレクトに求めている。しかしそのことにも慎重であるべきだ。次に、そのことを考えてみよう。

## III

『偉大なギャツビー』に関しては、先にも指摘したように、ホールデンの意見も D.B. の意見も絶賛で一致している。まず、それが意味することから考えてみよう。

サリンジャー自身は、若い頃よりフィッツジェラルドに敬意をもち憧れていた。たとえば、アーサイナス（Ursinus）・カレッジに在学中の19歳から20歳の頃にすでに、アンダースン（Sherwood Anderson）とラードナー（Ring Lardner）とフィッツジェラルドの 3 人に憧れていて、第一級の作家だと見なしていることを学内の雑誌に書いている（Hamilton 53)。25歳になっても、トルストイ（Aleksei Tolstoi）とフィッツジェラルドとが、サリンジャーにとっての文学上のヒーローだった（Hamilton 83)。またサリンジャーが38歳のときに発表された短編「ゾーイー」(“Zooey,” 1957）のなかで、サリンジャー自身の姿が反映されていると見なされることが多いバディ（Buddy Glass）は、『偉大なギャツビー』を引用して自分の意

見を述べているだけでなく、『偉大なギャツビー』を自分にとっての『トム・ソーヤー』（*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876）だったとも述べている（*Franny* 49）。

これらのことから、サリンジャーは少なくとも19歳頃から『ライ麦畑でつかまえて』を出版した32歳（1951年）頃までは、フィッツジェラルドを優れた作家だと一貫して見なしていたのが分かる。実際のところ、サリンジャーの初期の代表作「バナナフィッシュに最適の日」（1948年１月出版、28歳で執筆）には、フィッツジェラルドの初期の中編「メイデー」（“May Day,” 1920）のつよい影響が見られる。両者のおもな共通点としては、次の３点を挙げることができる。まず、主人公がともに戦争からの帰還兵で、次に、ちょっと耐えられないような女と結婚して（結婚するはめになって）いて、最後に、明白な理由もなくこめかみを撃ちぬいて拳銃自殺する３点である。このようにサリンジャーは、自作にフィッツジェラルドの作品の骨格を取りこむほどの影響をうけている

だから『ライ麦畑でつかまえて』なかで、ホールデンも兄の D.B. も『偉大なギャツビー』を絶賛するのは、作家サリンジャーがフィッツジェラルドをぶれることなく敬愛していたからだと考えても良さそうだ。さらにフィッツジェラルドは、1934年に『夜はやさし』（*Tender is the Night*）を出版して以降、作家としての才能も人気もきゅうそくに低下した。そして1940年には44歳で若死にしている。だからフィッツジェラルドは、サリンジャーにとって、現在の自分の前に立ちはだかっている現役の偉大な作家ではなかった。いわば安心して全面的に絶賛できる「過去の」作家だった。このことも、作家サリンジャーが、つまりホールデンと D.B. とが一致して『偉大なギャツビー』を絶賛する理由のひとつだろう。

一方、ヘミングウェイにたいする作家サリンジャーの態度には微妙なところがある。これから名声を得ようとしている若い野心的な作家サリンジャーにとって、ヘミングウェイは20歳年長の名声の確立した現役バリバリの大作家だった。たとえば、ヘミングウェイの傑作『老人と海』（*The Old Man and the Sea*）は1951年に執筆され、1952年に出版されている。そんなヘミングウェイは、『ライ麦畑でつかまえて』（1951年出版）を執筆中のサリンジャーにとっては、目標でもあり、乗りこえたい大きな壁でもあった。当然ヘミングウェイにたいする態度は微妙になる。

若い頃のサリンジャーにとっても、ヘミングウェイは追いつき乗りこえねばならない作家だった。だから若い頃のサリンジャーのヘミングウェイにたいする評価は辛い。たとえば、アーサイナス・カレッジに在学中（1938年秋〜1939年春）のサリンジャーは、ヘミングウェイが『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*）と『殺し屋たち』（*The Killers*）(マ)と『武器よさらば』とを書いた以降では、「ちゃんとした仕事をせず、うぬぼれたたわいない話をしている」（underworked and overdrooled）（Hamilton 49）と辛らつに批判している。

しかしパリ解放直後の1944年の８月の下旬に、サリンジャーは部隊の同僚クリーマン（Werner Kleeman）と一緒に、パリのリッツホテルに滞在していたヘミングウェイに会いに

わざわざ出かけて、ヘミングウェイに親しく声をかけてもらって感激している。当時のヘミングウェイはすでに「世界の巨人の一人」（Kleeman 285）だったから、それも当然だった。このことはベーカー（Carlos Baker）によるヘミングウェイの伝記からもあきらかである。ベーカーは、ヘミングウェイの作品からサリンジャーが感じていた「（ヘミングウェイは）ハードでタフ」（the hardness and toughness）だろうという印象が、実際に出会って、「ソフト」（“soft”）だという印象に変わったと書いている（Baker 420）。サリンジャー自身も、1946年７月27日のヘミングウェイ宛の手紙のなかで、その時のヘミングウェイとの出会いが、ヨーロッパにおけるすべての経験のなかで「唯一の希望に満ちたひととき」（Salsberg）だったと述べている。

しかし戦争から帰還後の1946年頃も、「尊大な態度でドライサー（Dreiser）からヘミングウェイまでの有名な作家を貶（けな）していた」とホッチナー（A.E. Hotchner）が証言している（Hamilton 100）。しかし同時に、先に引用した1946年７月27日のヘミングウェイ宛の手紙では、「パパさんへ」（Dear Poppa）と、20歳年長の大作家に甘える口調で書きだし、手紙の途中では「（私は）あなたの数多のファンクラブの会長」（Salsberg）だと自称している。つまり、若い作家が現役の大作家に気に入ってもらいたがっているのが、よく分かる手紙なのである。この「畏敬に近い」（close reverential）（Hamilton 86）気持ちを表した手紙は、サリンジャーの本心をちょくせつ表したものなのだろうか。

ヘミングウェイにたいするサリンジャーの本心はどの辺にあったのだろうか。そのことを考える切っ掛けにされてきたエピソードがある。そのエピソードは最初に『タイム』誌の1961年９月15日号に掲載された。そのエピソードは、フランスでヘミングウェイがサリンジャーの眼前で、「自分のルガーを取りだして鶏の頭を撃ちとばした」（took out his Luger and shot the head off a chicken）（Skow 4）という短いものである。そしてこの出来事をサリンジャーは短編「エズメ」で使ったと『タイム』誌は指摘した（Skow 4）。

このエピソードと指摘とは、その後のサリンジャーの研究に影響をあたえた。その２年後に出版された研究書では、「ヘミングウェイがドイツ製の拳銃の優秀さを誇示するために鶏の頭を撃ちとばしたとき、サリンジャーはうんざりした（became disgusted）」（French 25）と説明されている（＊ disgust には吐き気をもよおさせるの意味がある）。このフレンチの解釈（?）はそれなりに納得がゆくものだ。なぜなら、サリンジャーは1950年４月に発表した短編「エズメ」のなかで、ジープのボンネットに跳びのった猫を理由もなく撃ち殺す戦友の行為に、吐き気をもよおすほどの強烈な嫌悪を感じている主人公を描いているからだ（*Nine* 110）。この方向の解釈は、1999年なるとさらに発展して「鶏の頭を撃ちとばすことは、サリンジャーが理解できない行為だっただろうし、まして許すことなどできない行為だっただろう。サリンジャーは恐怖を感じていた（Salinger was horrified.）」（Alexander 100）と解釈される。

つまり、ヘミングウェイがサリンジャーの眼前で鶏の頭を撃ちとばしたというこのエピソー

ドは、サリンジャーのヘミングウェイにたいする不信感や敬意の欠如の原因を示すひとつの証拠として引用されてきた。分かりやすくいえば、ホールデンが『武器よさらば』をフォニーだと断定する原因のひとつの証拠として引用されてきた。ホールデンのヘミングウェイへの攻撃が「説明できないように思える」（seemingly inexplicable）（French 58）から、それにひとつの解答をあたえるために利用されてきたエピソードなのである。

しかし『タイム』誌が掲載したこのエピソードは、ありそうな興味ぶかいエピソードだが、実は、事実をもとにした記述かどうかも分からないのだ。実際、『タイム』誌は時として記事を面白くするために創作することもあったようだ（Slawenski 190）。いずれにせよ、「サリンジャーが、ヘミングウェイのマッチョ気取りに我慢できかねていた」（Hamilton 86）のは、たぶん事実だったと思われる（Slawenski 102）。しかしこれまで、サリンジャー自身も『タイム』も、このエピソードにたいしてちょくせつコメントしていない。だから、このエピソードが『タイム』の創作だと考える研究者もいる。ブラウンは「（リッツホテルでの会見の後）二人は二度と会うことがなかった」（Brown 203）と断言している。また、マクダフィは「（その出来事は）けっして生じなかったと思われる」（McDuffie 89）と否定的に考えている。しかし先にも述べたように、このエピソードの真偽をこの時点で判断する材料はない。だから、このエピソードの真偽をこの時点で詮索してもあまり意味がない。そこで別の観点から、作家サリンジャーのヘミングウェイにたいする態度を考察してみよう。

## Ⅳ

私たちが忘れてはいけないのは、サリンジャーが『ライ麦畑でつかまえて』なかで言及しているヘミングウェイの作品が『武器よさらば』だけである点だ。この作品は1929年に出版された。一方、『ライ麦畑でつかまえて』の舞台背景は1949年の12月から翌年の夏までで、出版は1951年７月16日である。サリンジャーは、戦争を扱ったヘミングウェイの作品として、1940年に出版された『誰がために鐘は鳴る』（*For Whom the Bell Tolls*）を選ぶこともできたのである。というよりも、世間の人びとの認知度からいえば、『誰がために鐘は鳴る』を選ぶ方が理にかなっている。なぜなら、『武器よさらば』は約20年前の1929年に出版された作品で、一方『誰がために鐘は鳴る』は約10年前の1940年に出版され、「一般読者が熱狂的に迎え入れた」（今村　23）作品だったからである。しかも前著は1915年の夏から1918年の春のイタリア戦線を時代背景にしているが、後著は1935年５月のスペイン内戦を舞台背景にしているからだ。言うまでもなく、スペイン内戦は当時のアメリカ人には記憶も新しい第二次世界大戦の前哨戦だった。内容的にも、『誰がために鐘は鳴る』の方が、第二次世界大戦の記憶も生々しい一般読者には身近な作品だったのだ。

それにもかかわらず、作家サリンジャーは、戦争を扱ったヘミングウェイの作品として、

『誰がために鐘は鳴る』ではなく、『武器よさらば』を選んでいる。それはなぜなのか。その謎をとく鍵はD.B.にある。

D.B.にとって、『武器よさらば』と『誰がために鐘は鳴る』との違いはどこにあったのだろうか。両作品とも、ヨーロッパの戦場を舞台背景にしているのは同じである。また、主人公が両者とも自分の意志で戦場にやってきたアメリカ人の青年であるのも同じである。しかし主人公の戦争や戦闘組織との関わり方が違う。

『武器よさらば』の主人公ヘンリー中尉は、傷病兵輸送要員だったこともあり、敵を殺すためにちょくせつ攻撃することはない。しかも戦場を経験するなかで、無垢だったヘンリーは、戦争に幻滅し、軍隊にいることに意義と意味を見いだせなくなる。そしてある戦闘での敗北を契機にして、前線から逃亡する。敗走のさなかでさえも、前線からの離脱は、物語のなかでも描かれているように、即銃殺される軍紀違反だった（*Arms* 202-04）。だからヘンリーは、味方の軍隊組織（憲兵）に追跡されるのを恐れて、身分を隠して国外にまで逃亡をつづけなければならなかった。ここでも軍隊組織のもつ非人間性が印象ぶかく描かれている。さらに、ヘンリーが軍隊組織からの逃亡を決意したのは、愛する女のためだった。そして愛する女との逃亡生活が、全頁の4分の1以上にわたって描かれている。つまりヘンリーは、女との愛を貫くことに、戦争や軍隊よりも意味や重要性を見いだしているのだ。自らの意志で兵士であることを止め、戦場を去ったのである。そんな主人公を描いている作品が、『武器よさらば』なのである。

しかし一方、『誰がために鐘は鳴る』の主人公ジョーダン（Robert Jordan）は、共和政府軍のゲリラ戦のリーダーとして、スペインの山中に入る。敵の兵士も射殺するし、戦闘に消極的な味方の人物を排除し、味方を戦闘的なゲリラ隊につくりかえる。味方のゲリラ組織に信頼を寄せ、組織の協力をえて橋の爆破という任務を全身全霊で勇敢に遂行する。そして最後に、負傷したジョーダンは、味方のゲリラ隊を守るために、自分の身を投げ出して死んでゆく（*Bell* 490-95）。戦闘にたいする疑問も、ゲリラ隊（＝戦闘組織）にたいする疑問もない。戦いの意義を信じ、戦闘組織に信頼と愛とを寄せ、勇敢に戦う男の姿が描かれている。だからこの作品は勇敢な戦士を賞賛した作品となっている。

このように、二つの作品を比較してみると、主人公の戦争や戦闘組織との関わり方が正反対なほど違う。一方で、『ライ麦畑でつかまえて』のD.B.は、戦場を経験した後、戦争と軍隊とを憎むようになっている。戦場を経験した後のヘンリーの心の軌跡とほぼ同じである。だからこそD.B.は、勇敢な戦士を描いた評判の最近作『誰がために鐘は鳴る』ではなく、戦争と軍隊とを嫌悪して、それ以外の別のものに価値を発見して、それを守るために奮闘する主人公を描いた『武器よさらば』に感激したのだ。まただから、16歳の弟のホールデンに読むようにあえて勧めたのである。さらに言えば、この時のD.B.は、ヘンリーが見つけた看護師キャサリン（Catherine Barkley）に相当する対象を見つけられていなかったから、ますます『武器よ

さらば』に感激していたのかもしれない。しかし16歳のホールデンは、作品をそこまでふかく読むことができなかった。だから、『武器よさらば』をフォニーな作品だと貶（けな）したのである。

ここでもう一度繰りかえせば、D.B. は作家サリンジャーの姿と近い人物として描かれている。だから D.B. の『武器よさらば』も「スゴイ」という最大限の評価は、作者サリンジャーのこの作品への評価に近いと考えるべきだろう。言いかえれば、作家サリンジャーは、作品鑑賞能力がまだじゅうぶんでないホールデン、すなわちギャツビーが使う Old Sport という呼びかけ語が気に入ったから『偉大なギャツビー』はすばらしい作品だと主張しているホールデンに、『武器よさらば』をフォニーだと言わせている。しかし一方でサリンジャーは、『武器よさらば』の主人公ヘンリーと同じように戦場を経験した大人で、しかもプロの作家である D.B. には、『武器よさらば』がすばらしい傑作だと言わせている。作家サリンジャーは、ホールデンとは違って、『武器よさらば』を高く評価しているのだ。

## まとめ

実際、ヘミングウェイ自身も、著書の『武器よさらば』をサリンジャーが高く評価しているのが分かっていたと思われる。だからこそ、ヘミングウェイはフィンカ・ビヒア（Finca Vigia）の自分の書斎に『ライ麦畑でつかまえて』と『ナイン・ストーリーズ』とをもっていた（McDuffie 96）のだろう。また、1959年に秘書として雇った女性に、『ライ麦畑でつかまえて』を買い与えた（Valerie Hemingway 58）のだろうし、さらに、同じころに知人に、同時代のアメリカの作家でもっとも賞賛するのは、「サリンジャーとマッカラーズ（McCullers）とカポーティ（Capote）である」（Valerie Hemingway 58）と言ったのだと思われる。

しかしヘミングウェイは気づいていたかどうかは分からないが、サリンジャーが、1951年の著著で『武器よさらば』を取りあげて誉めているということは、評判になった最近作の『誰がために鐘は鳴る』には低い評価しか与えていないともいえる。つまり作家サリンジャーは、作家フィッツジェラルドにたいする場合と違って、作家ヘミングウェイにたいしては一貫した態度がとれないのである。ヘミングウェイの作品に関しては、高く評価するする作品もあるし、高く評価できない作品もあるのだ。言いかえれば、このゆれ動く評価を、作家サリンジャーは、ホールデンの『武器よさらば』への酷評と兄 D.B. の同作品への賞賛という矛盾した態度で、間接的に表しているともいえる。

### 引用文献

Alexander, Paul. *Salinger: A Biography*. Los Angeles: Renaissance, 1999.
Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Macmillan, 1969.
Brown, Craig. *Hello Goodbye Hello*. New York: Simon & Schuster, 2011.

Fitzgerald, F. Scott. “May Day.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner’s 1995. 97-141.

French, Warren. *J.D. Salinger*. 1963. Boston: Twayne, 1976.

Hamilton, Ian. *In Search of J.D. Salinger*. London: Heinemann, 1988.

Hemingway, Ernest. *A Farewell Arms*. 1929. New York: Scribner’s, 1997.

——. *For Whom the Bell Tolls*. 1940. New York: Scribner’s, 1996.

Kleeman, Werner. *From Dachau to D-Day*. Ed. Elizabeth Uhlig. New York: Marble House, 2006.

Hemingway, Valerie. *Running with the Bulls: My Years with the Hemingways*. New York: Ballantine Books, 2005.

McDuffie, Bradley R. “For Ernest, with Love and Squalor: The Influence of Ernest Hemingway on J.D. Salinger.” *The Hemingway Review* 30, no 2 (Spring 2011): 88-98.

Salinger, J.D. *The Catcher in the Rye*. 1951. Boston: Little, Brown, 1991.

——. *Franny and Zooey*. 1961. Boston: Little, Brown, 1991.

——. *Nine Stories*. 1953. Boston: Little, Brown, 1991.

Salsberg, Bob. “Salinger’s Letter to Hemingway to Be Displayed in Boston.” 27 July 1946. *US Today*. 27 May 2010. <http://www.usatoday. com/travel/destinations/2010-03-27-boston-salinger-hemingway-letter_N.htm> Web. 12 August 2012.

Skow, John and the editors of *Time*. “John Skow and The Editors of *Time* — Sonny: An Introduction.” *J.D. Salinger and the Critics*. Belmont: Wadsworth, 1962. 1-7.

Slawenski, Kenneth. *J.D. Salinger: A Life*. New York: Random House, 2010.

渥美昭夫「フィッツジェラルド——人と作品」『フィッツジェラルド作品集１』（荒地出版社　1981年）233-45.

今村盾夫「誰がために鐘は鳴る」『ヘミングウェイ大事典』今村盾夫・島村法夫監修（勉誠出版　2012年）21-24.

野間正二『「キャッチャー・イン・ザ・ライ」の謎をとく』（創元社　2003年）

（のま　しょうじ　英米学科）

2013年10月22日受理